

大学に入学したころ

総合政策学部 教授 野村 亨のむら ともむら

1970（昭和45）年4月、青山学院大学に入学した。当時は1960年代後半に始まった学生運動のさなかで、前年1月には東大紛争により、安田講堂を占拠した過激派学生団体と機動隊との間で攻防戦が繰り広げられるなど、物情騒然とした世の中だった。青山学院も御多分に漏れず、キャンパスには立て看板が林立し、ヘルメット姿の学生運動家たちが学生会館のテラスからハンドマイクで演説する声が終日響いていた。その内容はただ「革命」とか「闘争」などの左翼用語を羅列しただけの空疎なもので、傾聴に値するような演説ではなかった。授業が始まると過激派学生が教室に押しかけてきて、教師に「クラス討論会にしろー」と迫り、たびたび休講になった。間もなく大学自体が休校になり、構内がバリケード封鎖されて図書館等に入れなくなってしまった。私は仕方なく毎日別のところで勉強するようになった。行き先は神田、神保町界隈である。昼間は神保町交差点角の岩波ビル8階にあったブリティッシュ・カウンシルの図書室に行つて英語の本を読んだり、あるいは馴染みの古書肆・一誠堂書店2階の洋書部で自分の背丈の倍もある書架に梯子はしこを掛けて上り、高価で手が出ない東洋学の書籍を拾い読みしたりして過ごした。黄昏時になるとランチョンや、いもやなど、学生向けの食堂で夕食を摂った。たまにアルバイトの収入があると大概は書籍代に消えてしまい、立ち食い蕎麦で我慢することもしばしばだった。夜になると御茶ノ水のアテネ・フランセでフランス語の授業に出て、将来のフランス留学を夢見た。別の夜には、湯島聖堂内にある斯文会しぶんの講座で中国語や論語の素読を習った。

大学紛争のとはっちりで学部最初の2年間はフイになったが、代わりに好きな学問が存分にできたので青春を無駄にしたとは思わない。当時の神田界隈は私にとって最高に楽しいアミューズメントパークだった。あれから40年、還暦を過ぎた今でも時折、御茶ノ水駅頭に降り立つと懐かしさがこみ上げてくる。神田は私にとって甘酸っぱい青春の思い出がいっぱい詰まった町である。



談話室

教員によるエッセイコーナー